

書評・紹介

Peter Fenner :

*The Ontology of the Middle Way*

加藤 均

ブラーサンギカ派(帰謬論証派)の代表的論師である月称(Candrakīrti)の主著『入中論』(*Madhyamakāvatāra*)は、周知の如く三百三十の詩頌(kārika)とその自註(Thāṣya)からなり、主として『十地経』(*Dasābhūmika-sūtra*)の十波羅蜜に依拠してそれぞれの階梯における中観の精髓を解説するものである。その後の中観派の思想的発展に与えた影響を考えれば、この論書の有する重要性は言うべくもない。残念ながら、サンクリット原典は現存しないが、今世紀初頭、Louis de la Vallée Poussin によりチベット訳の校訂テキストとその仏訳(未完)が公にされて以来、この書は国内外で多くの注目を集めてきた。特に、近年になって、その解説研究が本格化し、現在ではチベットの学僧ツォンカム(Tsong kha pa)の『入中論』に対する註釈、『意趣善明』(*Abu ma dgongs pa rab gsal*)にまで研究が及んでいる。「小川一乘著『空性思想の研究』(文栄堂、昭和五十一年)並びに『空性思想の研究Ⅱ』(文栄堂、昭和六十三年)など」

さて、海外において最近、この月称の『入中論』を文献的軸に、中観派の思想体系に論究の矛先を向ける著作が相次いで公開された。即ち、C. W. Huntington, Jr.: *The Emptiness of Emptiness: An Introduction to Early Indian Madhyamika* (University of Hawaii Press, 1989) と同じく取り上げる Peter Fenner: *The Ontology of the Middle Way* の二書である。本来ならば、同じく右記二書を併せて紹介すべきであろうが、Huntington の所論のごとくは José Ignacio Cabezon の書評 (*The Journal of International Association of Buddhist Studies*, Vol. 13 No. 1, 1990, pp. 152-161) 並びに Paul Williams の Review Article ("On the Interpretation of Madhyamaka Thought", *Journal of Indian Philosophy*, Vol. 19 No. 2, June 1991, pp. 191-218) がすでに公表されているため、後者のみを扱うこととした。

\* \* \*

本書は序と結を除く四つの章からなる本論と二つの補足(appendix)によって構成されている。目次からその表題をあげれば、以下の通りである。

- Introduction
- Chapter 1 The Introduction to the Middle Way [MA] and Its Religious Content
- Chapter 2 The Profound View
- Chapter 3 Analysis and Insight

#### Chapter 4 Insight and Extensive Deeds

#### Conclusion

#### Appendix 1 A Translation of the Verses of the *Introduction to the Middle Way* [MA]

#### Appendix 2 Tsong kha pa's Section Headings in the *dZu na dgongs pa rab gsal* (Trans. with Michael Richards)

このなか、Appendix 1は Poussin の刊本を底本にした『入中論』の詩頌 (karika) の英訳、Appendix 2は『意趣善明』の科文 (sa boad) の翻訳である。特に『入中論』(頌)の翻訳については、先にあげた Huntington の著書にもゲルタ派の学僧 Nangyal Wangchen と共同による英訳が含まれており、両訳を比較検討することも一つの課題であろうが、ここでは紙面の都合もあり、これについては機会を改めたい。

さて、本論にうつってあるが、Introduction によれば、その目的は中観派の思想体系における三つの関係性、即ち(1)帰謬論的分析 (consequential analysis) と空性への智慧 (insight into sunyata) と定義される般若波羅蜜 prajñāparamitā との関係、(2)「方便 upāya」と「智慧」との関係、(3)中観哲学と大乘仏教の哲学的教義的モデルとの関係、特に「智慧」、「慈悲 karuṇā」、「菩提 bodhi」の関係と相互作用を、主に『入中論』での論評を再構築することにより明らかにすることである。(1)の関係性の説明には第二章と第三章が割かれ、(2)と(3)の関係性については第四章が当てられている。特に(1)の関係性については

「分析と智慧との関係に焦点をおく第一の領域の諸問題はもっとも大きな注目と解釈上の難しさを引き起こす。なぜなら、それらは中観研究者にとっての永遠の関心事であるからである。他の二つの領域はこの中心的関心事から派生したものと追求される」(p. 3)と著者も述べているように、氏の研究の中心課題であり、筆者にとっても最も関心を引くところである。そこで本稿では(1)の関係性究明の核心部分である第三章 (Analysis and Insight) の前半部を軸に、本書の内容の紹介を進めていくことにするが、その前に一言、著者について触れておきたい。本書の著者 Peter Fenner に関して筆者の知るところは少ないが、Foreword 等によれば、次の如くである。氏はオーストラリアの University of Queensland の Ph. D. を取得されたが、その時の学位論文を加筆修正したものが本書である。氏はクイーンズランドにある Chenzig Institute の仏教コースで初めて『入中論』と出会い、その後はオーストラリアやネパールでチベットの学僧による数多の中観思想コースに参加されたこと。また、The University of Wisconsin (Madison) での一学期間 Prof. Lhundup Sopa のホスピタリティを受けたこと。現在はオーストラリアの Deakin University に在職されていることである。また、著者は本書の他に "A Reconstruction of the Madhyamakavatara's Analysis of the Person" (*The Journal of the International Association of Buddhist Studies*, Vol. 6 No. 2, 1983, pp. 7-34) と "Candrakīrti's Refutation of Buddhist Idealism" (*Philosophy East and West*, Vol. 33

\* \* \*

まず、第三章以外の章について簡単に言及しておこう。

第一章では『入中論』の内容が概観される。この中で特徴的なことは、著者が『入中論』を再構成するための解釈学的手段 (hermeneutical device) として「深遠 gambhira」(profound) と「広範 udara」(extensive) という分類を採用していることである。これは月称により言及され、ツォンカッパによって『入中論』の構造を理解するために特に注目された分類である。このうち、「深遠」は空性に、「広範」はその他すべてのもの、「たとえば、菩薩や諸仏によって獲得されると言われる五つの完全性 (perfection/paramita)、能力、超感覚的認識、そして知識等の技巧あるいは方便 (upaya)」に関わる。また、「これら二つの(分類)項目 (rubric) は、' 真実の二つのレベル (dravyastya) すなわち勝義 (the ultimate/paramārtha) と世俗 (the conventional/samvṛiti) '、あるいは社会的なもの (the social/vyavahāra) と異形同質的に関連し、' さらに、この二対の諸項目は「認識論的に強調される智慧 (prajña) と技巧あるいは方便 (upaya) の分類と相関する」。(p. 28) 著者はこの分類を念頭において、第二章の「深遠な見解」(The Profound View) と四章の「智慧と広範な行為」(Insight and Extensive Deeds) の章分けを行なっている。

第二章は「深遠な見解」即ち『入中論』における空性説の考

察であり、その中心となるのは『入中論』第六章に見える帰謬論的分析の形式と人法二無我の論説や唯識説批判といったその適用例の略述である。この中で著者は月称の分析の救済論的意味 (soteriological meaning) を強調する。つまり、この分析は単に「あらゆる哲学的思考における形式的な論理上の誤りを提示することを主な目的とする一つの体系」(p. 56) と解釈されるべきではなく、この分析を行なう菩薩自身に空性への智慧 (Prajña) を生起させ解脱に至らしめる手段として位置づけられなければならないと言うのである。しかし、もしそうであるなら、本来概念的操作である帰謬論的分析がどのようにして非概念的な空性への智慧を生じさせることになるのであろうか。この過程を論じたのが第三章であるが、これについては後に取り上げる。

第四章は、「深遠 gambhira」と「広範 udara」な教義との関係性への考察であり、著者の論究の矛先は多岐にわたるが、その中心の一つは冒頭でも関説した通り、「智慧」、「慈悲」、「菩提」の關係性を『入中論』において説明することである。しかし、著者が結語 (p. 205) で述べているように、説得力のある結論には至っていない。ここでその論評をまとめると以下の如くである。

『入中論』の教義的構造から、智慧は他のものの病いに対応する活動的な慈悲を發展させるために菩薩にとって必要な条件であると推論することができる。一方、慈悲は仏の一切種智にとつて必要な条件ではないが、道具的な原因 (instrumental cause)

と考えられており、そして智慧は仏の一切智にとって有効な世俗知 (valid conventional knowledge) を保証するものであり、必要な条件であると考えられたのであろう。けれども、この解釈は、慈悲は智慧の完成に対して必要であり、また、智慧は菩薩や仏の広大な知識に依っていたという主張とは矛盾しているように思われる。といっても、少なくとも、智慧の発展と菩提の展開との間で、また、智慧と慈悲との間で働くように思われる、動的な依存関係は指摘することができるであろう、と結論づけている。

\* \* \*

さて、すでに述べたように、第三章では帰謬論的分析と空性への智慧との関係性が考察される。いま、その中心となる第三章前半部 (pp. 99-122) の論評を追ってみよう。

ここでは、まず著者は月称が用いる「分析 vicāra」という術語に着目する。中観派の vicāra は単に「諸事物の詳細、性格、特徴、関係等を考究することにかかわるアビダルマにおける vicāra」とは異なり、概念化の無化と結びつく概念的分析 (conceptual analysis) と言ふべきもので、それは「輪廻の束縛からヨーガ行者を解き放つと理解される、覚りそのものを生じやす」(p. 103) とする。著者はこのような中観派の vicāra を救済論の意味をもつという点で「勝義分析」(paramārtha-vicāra) / アビダルマの vicāra を「世俗分析」(saṃvṛti-vicāra) と呼ぶ。もちろん、こういった種別は月称の論書中には見いだせないが、

taṭṭva vicāra という用例が『入中論』や『プラサナパダー』に見出せることを考えれば、あなたがち不適當であるとは言えないであろう。

さて、著者は中観派のこの「分析 vicāra」が「論証のプラサナガの形態、即ちあらゆる主張に元来必然的に根ざすと考えられる論理的矛盾を引き出すことによって不合理な帰結を露にする、いわゆる論証の演繹的形態を用いる」(p. 104) とする。そして、「帰謬論的分析」(consequential analysis) に他ならないこの「分析 vicāra」が「思考の流れを無化する、あるいは少なくともある種の形の思考を排除するための一つの技巧であるとするなら、その構造的基盤には、概念化 kalpana の形成そのものやその「言語的」展開 prapñca、そしてこれらの維持と解消を支配する原則が含まれていなければならぬ」(p. 105) と述べ、その諸原則について論究の矛先を向ける。著者の言葉を引きながらその主張をまとめれば、以下の如くである。

まず、著者は「述定 (predication) は思考形成の鍵である。なぜなら思考は事物の同一性に依存して起こり、事物の同一性は事物が他のものと区別される境界をそれと与えるという意味で、事物への述辞の帰属、即ちそれを定義するものに依拠するからである」と述べているように、古典 (即ちアリストテレス的) モデルにおける思考形成の基盤である述定 (predication) という概念を提示する。そして、この考え方を通じて、「特相 nimitta」(feature) を把握するものと『俱舍論』で定義され、月称もそれを踏襲している「認知 saṃjñā」(recognition,

discrimination) という作用は事物に特相(述辞)を結びつける点で述定的であり、「こういった概念的識別 (conceptual discernment) があるとき、概念化 kalpana が確立され、ここから、信念、判断、推論等の言葉で表現されるであろういくつかのものの致密で複雑な織物を織りあげる、多様な「言語的」展開 prapañca が起こる」と言う。つまり、「概念的な蔓延と展開は、主辞・述辞命題という点で分析され得る『認知 samjñā』に依拠し、それに続いて起こる」ものとし、逆に「涅槃は『認知』の停止によって伴われる「言語的」展開の無化である」と主張するのである。(pp. 105-107)

さらに、中観的分析の中では、こういった「述定」(predication) を本質とする「認知」は「論理的対立物による定義の原則」(The principle of definition through logical opposites) に立って機能していると考えられるとする。この原則は「概念 A は概念非 A が形成される場合にのみ作られる。そしてその逆もしかりである。その述定的形式では、これは事物 A が定義される、即ちなんらかの述辞 P が非 P によって定義される」として述辞 P により特定化されるということである」と著者が述べているように、主辞を特定化する(定義する)述辞 P はその非 P に依って、逆に非 P は P に依ってのみ成立するという、述辞の相依相待関係 parasparāpekṣā を示す。したがって「此に依拠して彼が生ずる」(di la brten nas di byung ngo) とどう『入中論』の縁起の定義における二つの指示代名詞は、たとえば常と無常、有と無などの論理的対立物を指し示していなければ

ばならないのである。加えて、この点で述定には本来備わっている逆説(paradox)があるとと言う。なぜなら、述辞の相依関係は論理的に主辞 A に関する述辞 P と非 P の存在を同時に認めることになるからである。この逆説を明らかにすることこそが帰謬論的分析の目的であると著者は主張する。(pp. 107-108)

さて、このように、述辞は論理的対立物に依って生ずるが、ある事物に一つの述辞を帰属させる活動の中で分化して行く。つまり、述辞はまず二つの相互に定義する対立物という文脈において起こってくるが、『二分する能力 vikalpa』(dichotomising faculty) が概念的な指示物として役立つ事物を獲得しようとする中で二つの述辞を分化し、それらの一つをつなぎ止める」と言う。ここでは、相依関係にあるはず述辞がそれぞれ自立的なものとして現れ、異なった事物に対する述辞として働くようになる。「このような分化とあたかも独立したものとしてあるように定義される指示物の創出は「言語的」展開 prapañca によって引き出され、補強される」のである。(pp. 109-110)

こういった概念の展開過程では、矛盾律、同一律、排中律という三つのアリストテレスの公理もまた機能しているとする。特に「主辞 A に対して与えられた述辞 P は同時に同じ点で肯定され、かつ否定されることは有り得ない」、即ち A は P であると同時に P ではないということは有り得ないという矛盾律は、「帰謬論的分析の文脈の中では、なんらかの事柄について想定され得る可能な立場を二つの相互に排除する主張に二分化する(dichotomise) ための構造として使われている」。しかし、こ

の矛盾律と先の論理的対立物による定義の原則は分析者の心に葛藤を生じさせる。というのは、後者は「ある主張とその否定を同時に肯定する、即ちAはPであり、Pではない」という形で一つの事物に関して述辭の存在と不在を同時に肯定する方向性の中、概念化を構造化する」のに対して、前者は「形式的に、そして規定的に(たぶん心理的たてもきまらう)、主張とその否定を同時に肯定することを意識から遠ざける形で概念化を構造化する」からである。(pp. 117-118) そして、著者はこの点について結論的に次のように述べている。

概念化の流れは、帰謬論的分析によって述定に本来的に備わる逆説に気づくように向けなおされる。その(逆説)は、相互に矛盾した構造を形成してしまふ、心理的に不可能な(あるいは、少なくとも構造的に不安定な)状態を想定するように意識を追いやるというその性向により、述定化能力を衰退させ、結果、概念化の破壊と消滅を導き出す。そして、この破壊と消滅が「空性への智慧」(insight into emptiness)と解釈され得る(sjeban)。 (p. 122)

\* \* \*

龍樹 (Nagarjuna) や月称の論書を研究する場合、ともすれば他学派の主張を打破するために多用される帰謬論証それのみに目が奪われがちになる。言い替えば、その論証形式や構造の分析だけに関心の大半が向けられ、本来それが有する救済論

的なメッセージが見失われてしまうということである。その意味で帰謬論証とその救済論的意義とのつながりに焦点を当て、それを正面から解明しようとした著者の姿勢は高く評価されなければならぬ。今後の著者の研究活動には一層の注意が払われるべきであらう。

Peter Fenner: *The Ontology of the Middle Way* (Studies of Classical India. 1, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 1990)

〔付記〕

本稿校正中、冒頭で掲げた C. W. Huntington: *Emptiness of Emptiness* への J. I. Cabezon の書評に対し、著者からの反論と評者からのその応答が *The Journal of the International Association of Buddhist Studies*, Vol. 15 No. 1, 1992 に掲載されていたことを知った。ここに紹介して置く。

C. W. Huntington, Jr.: "The Theatre of Objectivity: Comments on José Cabezon's Interpretations of mKhas grub rje's and C. W. Huntington, Jr.'s Interpretations of the Tibetan Translation of a Seventh Century Indian Buddhist Text."

José Ignacio Cabezon: "On Retreating to Method and Other Postmodern Turns: A Response to C. W. Huntington."